

## 寛文六年の播磨掾

—『ほうねんき』の性格—

沙加戸 弘

寛文六年十一月報恩講をあてこんで、伊藤出羽掾は『よこそねの平太郎』(以下『平太郎』と略称する)、井上播磨掾は『ほうねんき』<sup>②</sup>と、それぞれ新時代を開くべき作品を競演した。

蓋し、真宗関係浄瑠璃において、平太郎伝はこの『平太郎』を以て、七高僧伝はこの『ほうねんき』を以て嚆矢とする。

しかしながらこの二作は、新局面を開いた作だけあって、共にさまざまな問題を含み、とりわけ『ほうねんき』は、真宗関係浄瑠璃の流れという面から見た場合、際だった特徴を有している。

当報告では、『平太郎』と『ほうねんき』の特徴に焦点をあて、その特異性の一端を明らかにし、以て寛文から延宝にかけての真宗関係浄瑠璃の隆盛を支えた三人の大夫——伊藤出羽掾・井上播磨掾・宇治加賀掾——の性格を説明する手がかりとしたい。

まずはじめに、『平太郎』について簡単にふれておきたい。この『平太郎』については、かつて拙論「平太郎伝の展開——浄瑠璃を中心として——」の中でふれ、

一、平太郎平氏説を打ち出し、平太郎の前半生を創作した。  
一、後半は完全な親鸞伝である。そのため前半部と後半部に断絶があり、前後に矛盾も多い。

一、従って、全体統一のとれた平太郎伝であるとは言い難い。

等の点について指摘した。

加えてこの『平太郎』の後半部は、井上播磨掾の前作『浄土さんたん記并おはら問答』を、ほとんど文辞もそのまま受け継いで成立している。にもかかわらず、『浄土さんたんき并おはら問答』<sup>④</sup>で使われていた「善心」(親鸞に相当)の名は、『平太郎』では伏せられ、「上人」とのみ語られているのである。これらの点について、以下二、三の視点を提示しておきたい。

第一に、前半の平太郎平氏説及び平太郎の前半生は新機軸である。これは、出羽掾と播磨掾の対抗関係という面から解釈されなければならぬであろう。

次に、平太郎伝浄瑠璃を標榜しながら、後半部完全な親鸞伝となったところには、出羽掾の親鸞伝に対する関心の深さがうかがわれる。

今一つ、「善心」の名が伏せられたのは、正保五年以後訴えを繰り返した東本願寺に対する対応と見ることができよう。

以上、総合してみるとこの『平太郎』は、寛文六年、伊藤出羽掾が抱えていた課題、すなわち井上播磨掾との対抗関係、真宗関係浄瑠璃とりわけ親鸞伝に対する大きな関心、そして東本願寺対策と、この三つを折衷する形で妥協点を見出した新作、という位置付けができるのではないかと考えられる。

この『平太郎』に対抗して、同年同月、井上播磨掾が上演した『ほうねんき』は、親鸞伝を中心として展開する真宗関係浄瑠璃、という視点から見ると、『平太郎』と際違った相違を見せている。論展開の都合上、大略を示しておこう。

第一 崇徳院の御宇、美作の国の武士漆間権左衛門時國は、伯

州の明石源内武者なかあきらと争う。

第二 ときくには争いよって死去し、子勢至丸は遺言によつて寺に入り、ほだい山から比叡山へと転じ、十五歳で出家、法然房源空となる。一切経を三度通覽して、善導の『観經疏』に至り、一向専修の義を立てる。

正治二年四月、法然は南都東大寺大仏建立に際して導師となり、諸宗の批判を破する。

第三 上人おほら入并しようほうもんの事

時の天台座主顕真は、諸山の僧を催して法然に法論を挑み、浄土の教を破却しようとする。

使を受けて法然は大原へ赴き、諸宗の僧の疑義を悉く論破する。

第四 上人るざい并かい中より鬼神あらわるゝ事

諸山の僧の讒言によつて法然は流罪、住蓮・安樂は死罪。四国への途次、かんだぎの遊女及び海中よりあらわれた鬼神を教化して、法然は配所へ赴く。

第五 上人帰京并仏法はんじやうの事

法然は配所において老漁夫を教化し奇瑞を示す。都では、凶事がおこり、勅免の宣旨が下される。

都への帰途、法然は勝王寺において別時念仏を修す。その会座へ善導影向。

法然は帰洛し、仏法は今に榮えている。

以上の大略を追って明らかのように、まず何よりもこの『ほうねんぎ』は、内容も構成も一貫した高僧伝浄瑠璃である。『平太

郎』のように、前後が分断されることもなく、また途中で誰が主人公なのかわからなくなる、というような内容の曖昧さもない。法然という一人の高僧の生涯を、劇的な事件を追いながら無理なく展開させ、法然浄瑠璃として間然するところがない、と言つてよい。

ところが、この作を真宗関係浄瑠璃として見た場合、つまり親鸞の師としての法然、という視点から見た場合、それまでの二つの『しんらんぎ』、特に播磨掾の前作『浄土さんたん記并おほら問答』とひきくらべて、不自然な程親鸞とのかかわりが無視されていることに気付くのである。最少限、流罪の段には必要と思われるにもかかわらず、である。

一見、これは想定享受対象が違うのではないか、法然伝ではあるが、敵密な意味では真宗関係浄瑠璃でないのではないか、とさえ思わせる。

しかし、この見方は否定せざるを得ない。『ほうねんぎ』は、「それおもんみるに。——中略——こゝにじやうとしんじやうのかいさん。ほうねん上人の。ゆらひをくはしくたづねたてまつるに。」(傍点筆者)

と始まる。播磨掾がこの作を、真宗関係浄瑠璃であると考へていたことは明らかである。

となれば、親鸞の師を素材とした浄瑠璃において、播磨掾が不自然な程親鸞の事蹟に及ばなかったのは、それなりの理由があったと考へざるを得ない。

すなわち、作品として見た場合にそのあらわれ方が全く異なっているにもかかわらず、ここには出羽掾が『平太郎』を上演したと全く同じ理由が考へられよう。

真宗関係浄瑠璃に深い関心をよせ、一方で出羽掾と對抗関係にあり、かつ東本願寺の訴えによる上演禁止をかわそうとする播磨掾が、まぎれもない真宗関係浄瑠璃でありながら親鸞に一行もふれず、しかも親鸞を描いたに近い効果をあげうる、そしてよせあつめてなく一貫した斬新な浄瑠璃を上演したのである。素材は「正信念仏偈」等で真宗門徒に耳なれた念仏伝燈の祖師達——七高僧——であった。

つまりこの『ほうねんぎ』は、出羽掾同様さまざまの課題を持つ播磨掾が、その課題を足して二で割る、折衷する、という方法ではなく、全く新しい素材と方法で一氣に乗り越えようとした、七高僧伝浄瑠璃の第一作、と言えよう。

これを裏づけるように、寛文六年以後、寛文十年『善だう記』、寛文十三年『十界二河白道とうしやくせんし』と、寛文中七高僧伝は播磨掾のお家芸とも言い得る様相を呈する。『善だう記』にせよ『とうしやくせんし』にせよ、真宗関係浄瑠璃を誣いながら、それぞれ独立した七高僧伝浄瑠璃であるという基本線は一貫して揺るがないのである。

しかし一方で、井上播磨掾は寛文十一年四月、大坂において『浄土さんたん記并おはら問答』を上演して東本願寺から訴えられている。これは、播磨掾における七高僧伝が、真宗関係浄瑠璃

として、あくまで親鸞伝を前提としたものであることを如実に示している。

東本願寺の対応を、大坂における『浄土さんたん記并おはら問答』の上演、という石を投じて測りながら、一方で親鸞伝とかかわりを持たない、それ自体独立した、かつまぎれもない真宗関係浄瑠璃——七高僧伝——の新しい世界を開拓した、という点に井上播磨掾の真宗関係浄瑠璃展開史における独自性を見ることができらる。

『ほうねんぎ』はずなわちその第一作、寛文中の播磨掾の方向を示した作、という位置付けができよう。

これに対して、伊藤出羽掾もまた、對抗関係の中から新しい方向を打ち出してくるのであるが、この問題については本報告の不備と併せ今後の課題としたい。

#### 註

- ① 東洋文庫蔵。今引用は『古浄瑠璃正本集第四』による。
- ② 赤木文庫旧蔵。同右。
- ③ 「大谷学報 第五十九卷 第二号」
- ④ 東京大学図書館蔵。
- ⑤ 大谷大学蔵『粟津家文書』中の「浄瑠璃本平太郎板行一件」による。